

短歌 我が家の戦中戦後史

中原区支部 須賀 一枝（子）

戦没者 須賀 一利

戦没地 中支

父は征く 三児の守り 両の肩 覚悟の母は 二十四歳

父のひざ 肩車無く 妹は 言葉少なき 子になりてゆく

一歳を 数えず逝きし 息子の<sup>こ</sup>供養 頼むと拾圓 戦地より届く

防空頭巾 もんぺに紙の ランドセル 入学嬉し 国民学校

終戦の 前夜ふるさと 熊谷に 炎の筆が 地獄絵を描く

常ならぬ 予感に防空壕開けず 子らの手を引き 母は家出づ

突如空に 敵機の轟音 迫り来ぬ 我が家の辺り 炸裂炎上す

火だるまの 転げ叫ぶも 助け得ず 人群れなだれ 修羅の道行く

春四月 胸躍らせし 学び舎<sup>や</sup>よ いま痛ましき 避難所となる

一樣に 影失ないし 焼け跡は 片付は遅々と 皆日暮れ待つ

八月の 陽<sup>ひ</sup>は焼け跡に 居座りて 爛<sup>た</sup>れ井戸ポンプ 気丈に立てり

避難所に 叔父訪ね来て 同行す 今日より叔父は 四家族養<sup>よかぞく</sup>う

叔父宅に 身を寄せ母は 熊谷に 貸し間探しぬ 自立見据えて

再開の 国民学校 改称の 小学校は 徒歩一時間

机一つ 二脚の椅子に 三人掛け 朝の部昼の部 他校と交代

消息を 役所に問うも 埒あかず 易者は母に 父無事と告ぐ

終戦の 三週間前 父は戦死と 公報届く 明くる八月

一枚の 赤き紙もて 父は征き 土くれ一つと なりて帰りぬ

町はずれ 市営の家は 荒壁の 六畳一間と 四畳の土間と

ミシン箆笥 叔父の家より 引取りて 母は洋裁学校に通う

ミシン踏む 母は手あぶり だけの暖 仕立ての仕事 ぼつぼつと有り

焦らずに 母に甘えよ師は 諭す 高校出すは 母の悲願と

授業料 また忘れたか 担任の やや苛立ちの ため息一つ

高校を 晴れて卒業 明日からは 一家の柱 誓い新たに

あの人　は　だあれと父の　遺影指す　ああ母よ母　ただ愛おしき

春よりも　秋が好きよと　常づねに　その深む秋　母は旅立つ　（行年九十歳）